日蓮大聖人御書全集

上野殿御返事（うえのどのごへんじ）

（末法要法の事（まっぽうようほうこと））

新版
1872
〜
1875

上野殿御返事（末法要法の事）

弘安元年（'78）4月1日　57歳　南条時光

白米一斗・いも一駄・こんにゃく五枚、わざと送り給び候い了わんぬ。

なによりも、石河兵衛入道殿のひめ御前の、度々御ふみをつかわしたりしが、三月の十四・五やげにて候いしやらん、御ふみありき。「この世の中をみ候に、病なき人もこんねんなんどをすぐべしともみえ候わぬ上、もとより病ものにて候が、すでにきゅうになりて候。さいごの

御ふみなり」とかかれて候いしが、されば、ついにはかなくならせ給いぬるか。

臨終に南無阿弥陀仏と申しあわせて候人は、仏の金言なれば一定の往生とこそ人も我も存じ候え。しかれども、いかなることにてや候いけん、仏のくいかえさせ給いて、「いまだ真実を顕さず」「正直に方便を捨つ」とかせ給いて候があさましく候ぞ。これを日蓮が申し候えば、「そら事、うわのそらなり」と日本国にはいかれ候。

これのみならず、仏の小乗経には「十方に仏なし。一切衆生に仏性なし」ととかれて候えども、大乗経には「十方に仏ます。一切衆生に仏性あり」ととかれて候えば、たれか小乗経を用い候。皆、大乗経をこそ信じ候え。

これのみならず、ふかしぎのちがいめども候ぞかし。法華経は、釈迦仏、已今当の経々を皆くいかえしうちやぶりて、この経真実なりととかせ給いて候いしかば、御弟子等用いることなし。その時、多宝仏、証明をくわえ、十方

の諸仏、舌を梵天につけ給いき。さて、多宝仏はとびらをたて、十方の諸仏は本土にかえらせ給いて後は、いかなる経々ありて法華経を釈迦仏やぶらせ給うとも、他人わえになりてやぶりがたし。しかれば、法華経已後の経々、普賢経・涅槃経等には、法華経をばほむることはあれどもそしることなし。しかるを、真言宗の善無畏等、禅宗の師々等、これをやぶれり。日本国、皆このことを信じぬ。例せば、将門・貞任なんどにかたらわれし人々のごとし。日本国すでに釈迦・多宝・十方の仏の大怨敵となりて数年にな

しょぶつ　した　ぼんてん　付　たま　たほうぶつ　扉　閉　じっぽう　しょぶつ　ほんど　帰　たま　のち　きょうぎょう　ほけきょう　しゃかぶつ　破　たも　破　ほけきょう　いご　きょうぎょう　たにん　和　会　ふげんぎょう　ねはんぎょうとう　ほけきょう　讃　謗　しんごんしゅう　ぜんむいとう　ぜんしゅう　ししとう　破　にほんこく　みな　しん　れい　まさかど　さだとう　語　ひとびと　にほん　こく　しゃか　たほう　じっぽう　ほとけ　だいおんてき　すうねん

り候えば、ようやくやぶれゆくほどに、またこう申す者を御あだみあり。わざわいにわざわいのならべるゆえに、この国土すでに天のせめをかぼり候わんずるぞ。

この人は先世の宿業か、いかなることぞ、臨終に南無妙法蓮華経と唱えさせ給いけることは、一眼のかめの浮き木の穴に入り、天より下すいとの大地のはりの穴に入るがごとし。あらふしぎ、あらふしぎ。

また、念仏は無間地獄に堕つると申すことをば、経文に分明なるをばしらずして、皆人、日蓮が口より出でたりと

思
おもえり。「文はまつげのごとし」と申すはこれなり。虚空
の遠きとまつげの近きと、人みることなきなり。この尼御前
は、日蓮が法門だにもひが事に候わば、よも臨終には
正念には住し候わじ。

また、日蓮が弟子等の中に、なかなか法門しりたりげに
候人々は、あしく候げに候。南無妙法蓮華経と申す
は、法華経の中の肝心、人の中の神のごとし。これにも
のをならぶれば、きさきのならべて二王をおとことし、乃至、
きさきの大臣已下にないないとつぐがごとし。わざわいの

源
みなもとなり。正法・像法にはこの法門をひろめず。余経
弘
を失わじがためなり。今、末法に入りぬれば、余経も
法華経もせんなし、ただ南無妙法蓮華経なるべし。こう申し
栓
出だして候もわたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・
十方諸仏・地涌千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に
雑
余事をまじえば、ゆゆしきひが事なり。日出でぬれば、
僻
灯
とぼしびせんなし。雨のふるに、露なにのせんかあるべき。
栓
降
嬰児に乳より外のものをやしなうべきか。良薬にまた薬
養
を加えたることなし。

この女人(にょにん)は、なにとなけれども、自然(じねん)にこの義(ぎ)にあたり当て、しおおせぬるなり。とうとし、とうとし。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

弘安元年四月一日(こうあんがんねんしがつついたち)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

上野殿御返事(うえのどのごへんじ)